

号外（欧州の事情） No.2

英国の Forest Research

～土地の再生と都市の緑地化研究プログラム～

今年7月に開催されたWITブラウンフィールド会議(特別号3&4参照)において、英国「Forest Research (森林のリサーチ (以下FR))」の方々から数編の発表がありました。FRは、英国政府機関のForestry Commission (森林委員会、1967年設立)に所属している研究部隊であり、6つの研究部門から構成されています。今回WIT会議で発表なさった方々は「環境および人間科学部」の土地再生と都市の緑地化プログラムの研究者らでした。

同プログラムは次のような研究課題に取り組んでいます。

- ・ 持続可能な緑地空間の開発について
- ・ 緑地化による社会・経済・環境へのベネフィットについて
- ・ 汚染サイト浄化修復における植物の役割について
- ・ 緑地空間を建設するときの経済的な浄化修復手法について
- ・ 開発するサイトの優先順位付けについて
- ・ 持続可能な都市開発における緑地空間の役割の評価について

で、実際にWIT会議で発表された論文は以下のものです。

- ・ 異なる実験状況における植物の重金属摂取の比較
- ・ 汚染土壌由来の金属浸出におけるコンポストの効果
- ・ ブラウンフィールドサイトの緑地化
- ・ 経験知：ブラウンフィールドサイトから持続可能な都市の緑地空間の創造

(内容にご興味のある方はWIT Press出版のBrownfieldsⅢを参照してみてください。)

このように緑地空間の創造に特化してブラウンフィールド再開発を支援している研究グループが英国に存在しているのです。英国環境運輸地方省 (Department of the Environment, Transport & the Regions, UK) の調査報告によると、1988年から1993年にかけて英国内で再開発されたブラウンフィールドの19%以上が緑地空間となったとのこと。もちろん米国においてもブラウンフィールドの緑地化を考えているグループは存在しているのですが、英国ほどの勢いは見受けられません。米国におけるブラウンフィールド再開発は、経済的利益(税金や雇用の増加)をもたらすことでプロジェクトの成功度合いを測る傾向があります。一方、英国では政府が中心になって、即お金に換算するのがちょっと難しい価値をブラウンフィールド再開発で生み出している姿勢が見られます。

では日本ではどうでしょうか。身近な緑の減少が社会的な問題として指摘されていますよね。例えば、横浜市次期中期計画「課題と計画の方向性（計画期間 H18-22 年度）」をみると、市内緑被率は 1975 年から 2004 年にかけて 45.4%から 31.0%と減少しており、樹林地や農地等の保全対策が課題であるとの報告があります。具体的にはどのようにして対策を実行していくのでしょうか。近年、環境省、経済産業省、東京都がブラウンフィールド関連の委員会を立ち上げ、日本のブラウンフィールド問題の明確化とその対策について検討しているようです。一方で林野庁はどうかというと、HP をみる限りではブラウンフィールドの緑地化といった活動は見受けられません。これから新たな展開があるのでしょうか。

科学技術によって沢山の「便利さ」を獲得した現代社会には様々な心身の病が発生し、私たちはそれらと向きあわなければならなくなりました。そのような状況において森林が人間にもたす癒しの効果が「なんかいいよね」のレベルから「学術研究」のレベルにわたって関心を集めています。そのような関心が私たちのブラウンフィールド再開発に生かされることも可能なのかな、と思います。FR の経験知から学ぶものがあるのかもしれない。

坂野のつけたし

イギリスには、日本の土壤汚染対策法と同様に、環境問題としての土壤汚染を規制する法律があります。2000 年に制定された環境法「パート 2A」というのがそれに該当し、「汚染地」を定義し、人の健康に影響を与えるような土壤汚染サイトを特定し、必要な対策を行うよう、地域行政の役割を定めています。一方、ブラウンフィールドについては、都市の持続的発展を目的とした取り組みに代表される活動の中で、「かつて利用された土地」と簡単に定義されています。イギリス政府は、新規の住宅開発の 60%はブラウンフィールドで行うという政策目標を掲げています。郊外のグリーンフィールドを守り、インフラが整備されている都市部を有効に活用することは、ヨーロッパ型（もしかすると日本型も？）のブラウンフィールドなのかもしれません。